

# キャリア教育研究（中間報告）

## —「生きる力」を育むキャリア教育の具現化に向けて—

人づくり支援課進路指導支援班

### 研究の概要

平成23年1月、中央教育審議会において「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」が示された。この答申では、各学校におけるキャリア教育の充実方策として、次の3点が示された。

- 教育方針の明確化と教育課程への位置付け
- 重視すべき教育内容・教育方法の評価・改善
- 教職員の意識・指導力向上と実施体制の整備

この答申を受け、進路指導支援班ではこれまでに、静岡県内の小・中学校に対しアンケートを実施し、各学校でキャリア教育がどのくらい浸透しているかを探ってきた。

この結果、学校現場においては教職員のキャリア教育に対する理解や意識が十分とは言えず、実践内容もいわゆる「職場体験学習」等を行うことで満足している傾向が強いことが分かった。キャリア教育の本来の目的、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要となる能力や態度を育てること」を達成するために、また、その理念を学校現場に浸透させるためには、何よりも教職員がキャリア教育のよさを実感することが不可欠である。当班では、24年度、キャリア教育の基礎的な研究と浸透・普及のための方策について検討を行い、静岡県の教育の基本目標である「『有徳の人』づくり」と関連した各学校段階における能力を示した表（以下「能力表」）を作成し、教育活動の展開方法、及び評価方法（以下「県版キャリア教育学習プログラム」）を考え出した。

本研究では、25年度、研究協力校に対し「県版キャリア教育学習プログラム」を提示し、アクションリサーチを行う。そして、研究協力校において、この学習プログラムが教職員のキャリア教育のよさに気付くことに寄与したか（キャリア教育の意義認識のために機能したか）検証していく。この研究結果の発信を、静岡県内でのキャリア教育の普及、定着のきっかけとしたい。

**キーワード：有徳の人、生きる力、基礎的汎用的能力**

**キャリア教育の普及、キャリア教育学習プログラム、**

## 目 次

I	主題設定の理由	1
1	研究の背景	1
(1)	キャリア教育に関する教育界の動き	1
(2)	静岡県におけるキャリア教育の現状	2
2	研究の目的	4
II	研究の仮説	5
III	研究の方法	5
1	研究の進め方	5
2	検証の方法	6
IV	研究の内容	6
1	研究の実際	6
(1)	キャリア教育実践校の視察	6
(2)	キャリア教育の基礎研究	9
(3)	「県版キャリア教育学習プログラム」の作成	12
(4)	研究協力校への働き掛け	15
(5)	研究協力校でのアクションリサーチ（協議、実践）	16
2	研究仮説の検証、分析と考察について	16
V	研究のまとめ(中間まとめと今後の方向性について)	16
1	研究の成果（ここまでの研究で有益だったこと）	16
2	今後の課題	17
	参考文献・研究組織	18

# キャリア教育研究

## —「生きる力」を育むキャリア教育の具現化に向けて—

人づくり支援課進路指導支援班

### I 主題設定の理由

#### 1 研究の背景

##### (1) キャリア教育に関する教育界の動き

平成23年中央教育審議会では、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」を示し、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義付けた。ここで言う「キャリア発達」とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」である。人は各時期にふさわしい発達の課題を達成することによってキャリアを身に付ける。この答申は、キャリア教育はそのような一人一人の発達を支援するものであるとして、本来の理念に立ち返る重要性を説いた。また、キャリア教育で育成すべき能力として、これまでの文部科学省が示す「4領域8能力」、内閣府が示す「人間力」、経済産業省が示す「社会人基礎力」などを再構成し、「基礎的汎用的能力」（表1）を掲げた。現在、文部科学省は各学校向けに「キャリア教育の手引き」を作成・配布し、学校で行われる全ての教育活動全体を通して、この基礎的汎用的能力を育成するように学校現場に働き掛けている。

表1 基礎的汎用的能力の能力説明

人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力
課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

中学校キャリア教育の手引き（2011）より

## (2) 静岡県におけるキャリア教育の現状

当班では、これまでに小・中学校のキャリア教育担当者に対し、「キャリア教育に関するアンケート調査」を行った（小学校は平成21年度、中学校は平成23年度に実施、静岡県総合教育センター研究紀要第14号16号参照）。この調査は、小学校においては県内公立小学校330校、中学校においては県内公立中学校173校が対象となっている。次に挙げるのはこの調査で得られた、小学校・中学校現場のキャリア教育の現状と担当者の意識についての傾向、及びキャリア教育を推進していく上での今後の課題の集計結果である（なお、小学校については、アンケート実施後4年が経過しているため、現在の学校現場での状況には変化があったと考えられることに留意したい。）。

### ア 平成21年度「キャリア教育」に関するアンケート調査（小学校）の結果

- ・ほとんどの小学校において「キャリア教育は必要である」と認識されている。
- ・担当者は、小学校段階におけるキャリア発達課題として、「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」と意識している。
- ・「職業」に関わる教育活動のみが「キャリア教育」と認識している担当者もいる。
- ・「キャリア教育」に関する研修やパンフレット等が十分活用されていない。
- ・「キャリア教育は必要である」と認識されているにもかかわらず、時間的・精神的な余裕やゆとりがないこと、新しい教育活動に取り組まなければならないと考えられていることが、「キャリア教育」に取り組むことへの障害になっている。

### イ 平成23年度「キャリア教育」に関するアンケート調査（中学校）の結果

- ・校務分掌におけるキャリア教育の担当が、キャリア教育に特化して位置付けられている学校は少なく、進路指導主事や総合的な学習の時間の担当が務める学校が多い。
- ・キャリア教育を推進する校内組織を確立している学校は少なく、実際には、学年が主体となってキャリア教育の企画運営を行っている学校が多い。
- ・キャリア教育の全体計画や年間計画を作成している学校は半分以下であり、キャリア教育で育成すべき能力や態度を学校独自で設定している学校も少数である。
- ・キャリア教育の資料（パンフレット、手引、答申等）の活用状況は低く、校内研修でキャリア教育を扱う学校も少ない。そのため、教職員のキャリア教育に対する理解や意識も十分とは言えない。
- ・職場体験学習は、全ての学校で実施されているが、実施日数は2日以下の学校が半数である。また、学校外に職場体験学習における、連携した組織を持っている学校は20%であり、外部人材の活用や、学校外の教育資源を活用するための環境整備が、十分に整っていない学校が多い。

センター研究紀要では、このような調査結果を分析し、次のような課題を提起した。

「新学習指導要領の完全実施を控えた今、『将来、社会人・職業人として自立していくために、今、発達させるべき能力や態度がある』という前提に立って、答申で示された充実方策の3点に立ち返り、キャリア教育の視点で全ての教育活動を見直し、改善していくことが必要ではないだろうか。」（静岡県総合教育センター研究紀要第16号）

## ウ 小学校、中学校、高等学校の各学校現場でのキャリア教育推進上の課題

図1及び2は、小学校、中学校のキャリア教育担当者が抱えている、キャリア教育を推進していく上での課題を集計したものである。また、図3は高等学校において平成24年度に当班の助言の下、高等学校副校長・教頭会が実施したアンケート（公立高等学校99校対象）の集計結果である。

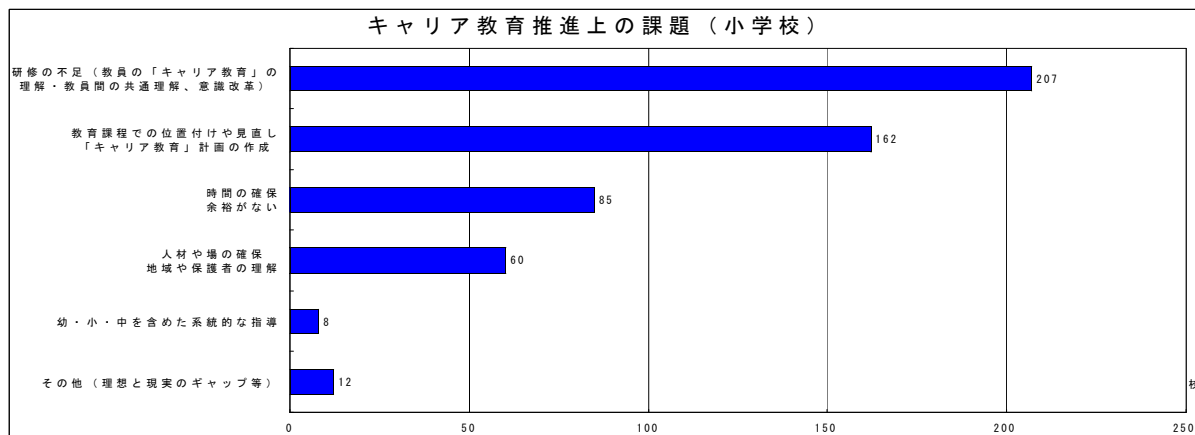


図1 小学校のキャリア教育推進上の課題（平成21年度）

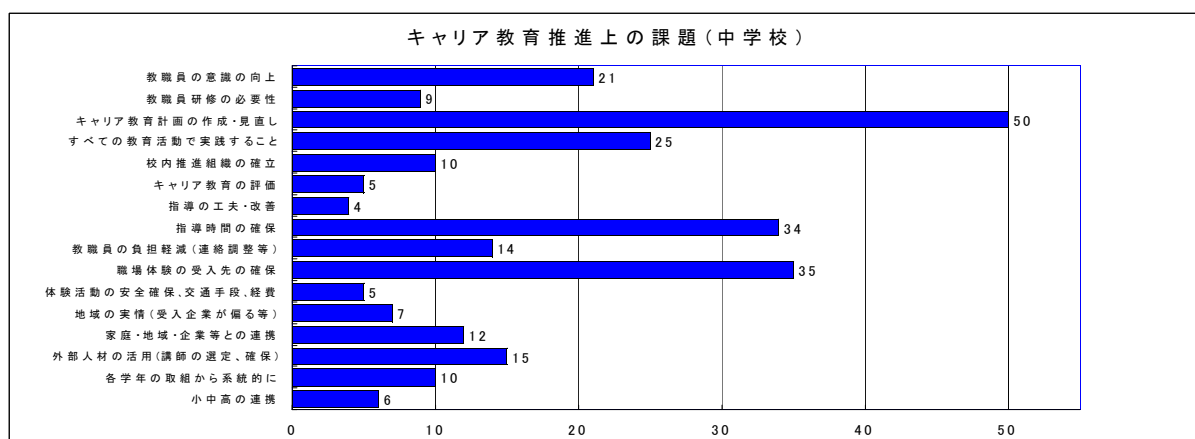


図2 中学校のキャリア教育推進上の課題（平成23年度）

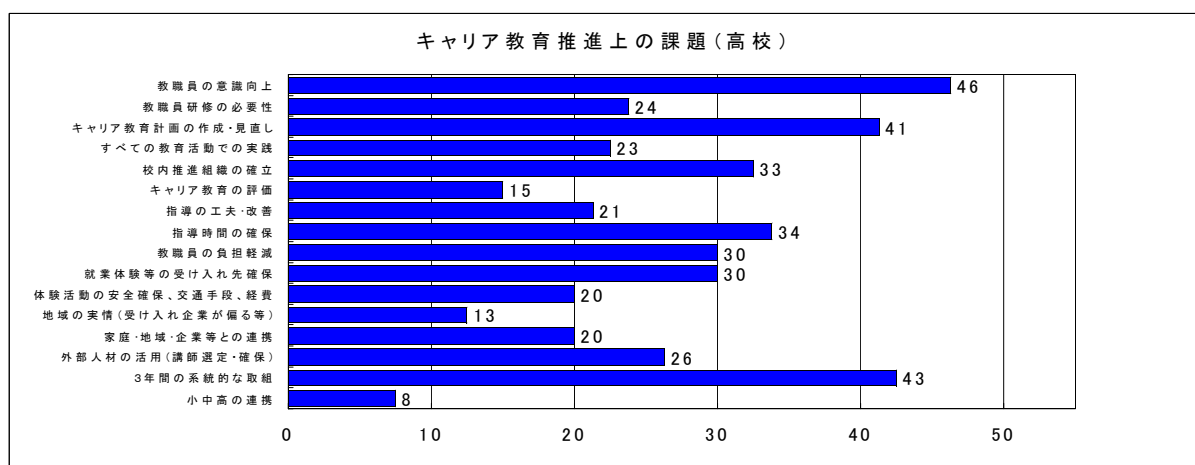


図3 高等学校のキャリア教育推進上の課題（平成24年度）

この調査結果に、センター研究紀要では小学校において下記のような推進上の課題があると指摘している。

- ・約3分の2の担当者が、「キャリア教育に関する研修の不足」を挙げている。
- ・約半数の担当者が「教育課程での位置付けや見直し・計画の作成」を挙げている。
- ・研修を行う時間も含めて「時間の確保」や「余裕がない」と多忙を理由に挙げる担当者は約4分の1である。

これらのことから、小学校でのキャリア教育の推進で最も課題となっていたことは「教職員の意識」であったと言えよう。ただ、ここで挙げられた課題は、4年前の回答であり、現在はこのような課題は克服に向けて努力されていると思われる。したがって、本研究を進めていくためには、小学校のキャリア教育の現状等についての最新のデータが必要となる。

一方、中学校、高等学校ともに、キャリア教育推進上の課題は、「キャリア教育計画の作成や見直し」であると回答した学校が多い。自校のキャリア教育の実践を明確に体系づけるために計画を作成したいという、担当者の思いの表れであると思われる。中学校においては、担当者として職場体験学習の受入れ先の選定や指導時間の確保に頭を痛めている現状もうかがえる。また、高等学校においては、「教職員の意識が低い」と感じている担当者が多い。中学校、高等学校ともに、学校を教職員がキャリア教育の情報を得やすい環境にする、整えることに課題があると言える。

キャリア教育は、児童生徒に全教育活動を通じて基礎的汎用的能力を育てることを目的に行われる教育活動である。しかし、これらのデータをみると、学校現場では計画的に推進されているとは言いがたい。取り掛かりとして、職場体験学習やインターンシップのような特定の教育活動を実施しようとする傾向があり、キャリア教育の必要性、重要性は理解しているが、「生きる力を育む」という真の目的を捉えた活動にする方法が分からない、考える時間もないという学校現場の実情がうかがえる。現場にとってキャリア教育の道しるべというべき具体的な方策を考え出すことが急務であると言える。

## 2 研究の目的

キャリア教育は、これからの厳しい格差社会を生き抜いていかねばならない子どもや若者にとって極めて重要であるが、本県の各学校現場では、そのよさが深く認識されているとは言いがたく、真の目的を捉えた実践はまだ少ない。本来の目的を捉えたキャリア教育が県全体へより普及するためには、きっかけとなる法令、施策等も必要ではあるが、実際に学校で指導を展開している教職員が、「キャリア教育は学校や児童生徒、自分にとって有益だ」と実感できる「現場目線での方策」が最も有効なのではないだろうか。本研究では、生きる力を育むという本来の目的を捉えたキャリア教育の県内普及を達成するために、「キャリア教育に対しての教職員の意識」を向上させる具体的な方策を探ることを目的とした。

当班が基礎研究、協議を経て作成した「県版キャリア教育学習プログラム」の活用を学校現場に働き掛けて実践した場合、「県版キャリア教育学習プログラム」や当班指導主事の支援方法等が、教職員の意識向上にどの程度寄与するのかを検証することで、キャリア教育の新たな具現化の方法を探っていきたいと考えた。

## II 研究の仮説

前章までで述べてきた背景や目的を踏まえ、本研究の仮説を以下のように設定する。

当班が「県版キャリア教育学習プログラム」を活用した実践を各学校に働き掛ければ、生きる力を育むキャリア教育のよさが教職員に認知され、キャリア教育は学校現場で定着し、児童生徒の基礎的汎用的能力が育成されていくだろう。

## III 研究の方法

### 1 研究の進め方

本研究は次のような内容と手順で進めていく。

- ①キャリア教育実践校の視察
- ②キャリア教育の基礎研究
- ③「県版キャリア教育学習プログラム」の作成
- ④研究協力校への働き掛け（訪問）
- ⑤「県版キャリア教育学習プログラム」実践（アクションリサーチ<sup>注</sup>）
- ⑥アクションリサーチのデータ（実践記録、事前事後アンケート）の検証

注：アクションリサーチについて（大野木、1997）。

アクションリサーチは、1940年代から50年代前半にかけて、クルト・レヴィン（Lewin, K.）によって提唱された方法で、70年代あたりから日本でも社会心理学や教育社会学などの領域を中心に大きな注目を浴びている。産業界における企業内社員教育、職場の改善運動などで以前から用いられ洗練されてきた。アクションリサーチでは、心理学などの基礎研究と、そこから引き出された知見の実践過程の相互のやり取りを強調する。研究（research）、実践（action）、訓練（training）が3つの柱であり、相互に補足し作用する。アクションリサーチの過程は表2のようにまとめられる。

表2 アクションリサーチの過程

- ① 現実場面を分析検討し、改善問題を設定する。
- ② 心理学等の知見を駆使し、改善策の仮説を立てる。
- ③ 改善策を具体的に実践する。場合によっては、実践のための訓練・教育を行う。
- ④ 改善策の効果を科学的に測定し、改善策（仮説）を評価・考察する。
- ⑤ さらに継続して改善すべきなら、①～④の手続きを重ねる。
- ⑥ 改善目標が達成されたら、ほかの場面へ応用し、一般化と限界を検討する。

本研究では、当班の指導主事が各研究協力校を訪れ、「県版キャリア教育学習プログラム」を提示して教職員が実践するための支援を行う。「県版キャリア教育学習プログラム」の展開における指導主事と教職員との協働（計画、実践、評価、改善の一連の流れ）をアクションリサーチと呼ぶ。

## 2 検証の方法

研究協力校で、児童生徒、教職員対象の「県版キャリア教育学習プログラム」を実践した事前と事後のアンケート調査を行い、その結果を分析し検証する。研究協力校の教職員が、キャリア教育のよさを実感できた場合、効果があったと考える。

本研究では、教職員がキャリア教育を「よい」と実感するのは、具体的には次のようなときではないかと考え、これらを視点としてアンケートを作成する。

- ・教育活動を行う意味や目的を理解し、指導する意欲が高まったと感じられたとき
- ・教育活動に対し、児童生徒が生き生きと取り組んでいると感じられたとき
- ・教育活動を通して、多くの児童生徒の能力が向上し、成長したと感じられたとき
- ・教育活動を通して、長所の発見など、児童生徒一人一人に対する理解が深まったとき
- ・教育活動を通して、教職員同士の関係が円滑になったと感じられたとき
- ・教育活動を通して、教職員集団がまとまったと感じられたとき

なお、アンケートは、研究協力校との事前協議を経て状況を把握した上で、更に詳しく検討し作成する。

## IV 研究の内容

### 1 研究の実際

#### (1) キャリア教育実践校の視察

当班では、キャリア教育の実践的研究を推進していく上で、すでに学校現場に浸透している具体的な手立てが参考となると考え、キャリア教育を教育課程内に明確に位置付けて先進的に実践している学校を視察した。視察した学校は、熱海市立桃山小学校、千葉県八千代市立高津中学校の2校である。

#### ア 熱海市立桃山小学校視察（平成24年5月23日）について

##### (ア) 桃山小学校の目指す学校像、特色について

- ・学校教育目標自体がキャリア教育の目標となっている。学校で行う全ての活動や機能をキャリアの視点で見直し、特に授業では「コミュニケーション能力の育成」に、日常生活では「おもてなしの心（相手に気持ちよくなってもらう心づかい）」に力点をおいて指導を展開している。
- ・平成24年度はキャリア教育に関連付けて読書教育、道徳教育、健康安全教育を重点的な教育活動に位置付けている。
- ・基礎的汎用的能力の育成を目指す授業改善と、「職場体験学習」などの体験学習をキャリア教育の中心としている。
- ・昨年度もキャリアの視点を入れて授業改善を試みたが、焦点化していなかったため成果も曖昧なものになっていた。今年度からは、コミュニケーション能力の育成に絞った取組に変更した。この力にこだわったのは、キャリアの基盤となる能力の一つであるのに加えて、国や県で重要視されている言語活動や確かな学力につながるものであることが要因である。
- ・学校関係者評価委員会「桃っ子を考える会」で、進学先である熱海中学校において、桃山小学校卒業生が「人前で自分の考えていることを表現することができない」という課題があると指摘されている。



- ・桃山小学校卒業生が、熱海中学校において、リーダーとして活躍することが多くなってきている。キャリア教育を軸とした学校運営をはじめたことにより、子どもにも表現力等がついてきているためと思われる。

**(イ) 桃山小学校が多方面で評価されている理由（教職員のキャリア教育に対する意識）**

- ・中学校を経験した教職員が多く在籍し、小学校卒業をゴールとするのではなく、まさにキャリア教育の視点に立ち、「この子たちが中学校で活躍するにはどういう力が必要なのか」をイメージした指導が行われているためと思われる。
- ・1～3年生を一つのステージとして3年生で一度リーダーを経験し、更に4～6年生をステージとして6年生でもう一度リーダーを経験するという、キャリア発達を念頭においたリーダー養成も要因に挙げられる。
- ・教職員が授業改善、体験学習等において児童を伸ばそうとする意識が、児童に伝わることで成長が促され、その成長を感じることで更に教職員が楽しく仕事ができるなど、良いサイクルができています。教職員が「勤務したい学校」となっている。

**(ウ) 所感**

学校内のあらゆる取組で、重点である「コミュニケーション能力」を育てようとする教職員の強い意図が伝わってきた。児童は、かしこまって授業を受けているという雰囲気は全くないが、良い意味で行儀もよい。他を頼らず自分の力で課題を何とか解決しようとする児童の積極的な姿があらゆる場面で見られた。キャリア教育の視点で見直された授業によって自立の意識が育てられた児童を目の当たりにし、深い感銘を受けた。当班が推進しようと考えている「職場体験学習だけでなく、全ての教育活動をキャリア教育の視点で見直す」という方向の妥当性が確認できた。

**イ 千葉県八千代市立高津中学校訪問視察（平成24年11月13日）について**

高津中学校は、キャリア教育の視点を取り入れた学習評価と授業改善の在り方について、国立教育政策研究所の指定を受け（23、24年度）、公開研究会を開催した。

**(7) 研究概要**

○研究主題「確かな学力と豊かな心を育む授業づくり」

～3年間を見通した評価規準づくりと評価方法の改善を通して～

○主題設定理由

考える場面や表現し合う場面等をどの教科の授業においても多く設定しているにもかかわらず、十分な成果が得られていない状況があった。そのため、授業改善の視点として「思考力・判断力・表現力」「関心・意欲・態度」の評価規準や評価方法について研究する必要がある。3年間の成長を見通した評価規準の設定が有効であると考え、キャリア教育における「基礎的汎用的能力」の視点を取り入れることにした。評価にキャリア教育の視点を取り入れることの利点は、次の3点と考える。

- ①同じ能力を段階的に積み重ねることで、それらの能力を具体的な行動の中で生かすことができ、発達段階を見通した指導につながる。
- ②評価に対して教科を横断する共通の視点を持つことができる。
- ③全ての授業で共通の目標を設定でき、全ての教科を通して「生きる力」が育成

できる。

#### ○研究の流れ

- ・各学年における「望ましい姿」の設定
- ・授業における教科の目標との関わりを検討
- ・評価規準に反映させ、活動等を工夫する
- ・授業実践を行い、評価をする

※基礎的汎用的能力の中で、教科の評価規準と関連の深い「人間関係形成・社会形成能力」と「課題対応能力」の2点に絞って取り組む。

#### ○教科の目標とキャリア教育との関わりについて

- ・「望ましい姿（基礎的汎用的能力）」が教科の目標と共通点を持つ場合は、評価規準に反映させて評価し、共通点を持たない場合は、「望ましい姿」を教科の目標を達成するための手立てとする。

#### ○成果

- ・基礎的汎用的能力と教科の目標を照らし合わせることで、授業の目標を明確にして指導・評価ができるようになった。
- ・全教科において同じ姿勢で「生きる力」につながる手立てを検討する体制がつけられた。

### (イ) 公開研究会全体会の内容

国立教育政策研究所の富山哲也調査官が、「キャリア教育の視点を取り入れた学習評価と授業改善－高津中学校の実践から－」と題した講演を行った。

○学力の3要素（基礎的な知識・技能、思考・判断・表現等、学習意欲）を育むことを目標にして、その目標に準拠した評価を手段として生かし、特色ある教育課程の編成をすることが大事である。

○高津中の研究は、教科の目標とキャリア教育の視点を照らし合わせ、それが重なる場合と重ならない場合とを整理した取組であり、子どもに対して教科で付けた力、キャリア教育で付けた力の両方を育成する優れた実践であった。

### (ウ) 所感

当班として、学校の中核的な教育活動である教科の授業にキャリア教育の視点を当てた推進方法は、現場のニーズが高いと認識している。今回の公開研究会に参加し、得た知見は次のことである。

○各教科の授業の中では、人間関係形成・社会形成能力育成の視点は取り込みやすいが、他の能力育成の視点は取り込みにくい。

○中学校でのキャリア教育、特に教科の中での推進については、中学生の発達段階の特徴を十分に考慮に入れる必要がある。教師が授業で期待する姿と実際の表れに大きな隔たりができてしまい、教師がキャリア教育をマイナスイメージとして捉えてしまうことになる。

○研究発表の成果等から考えると、教師が生徒に向き合う手立てとしてキャリア教育は指導体制作りに有効に働き、できた指導体制は生徒一人一人の能力育成に影響していくと思われる。

## (2) キャリア教育の基礎研究

当班では、キャリア教育の学校現場への普及のために、よりキャリア教育を理解し、分かりやすい言葉で学校現場に理念やよさを伝えていく必要があると考え、キャリア教育の理論等について議論を積み重ねた。班内で議論してきたことは、主に次の内容である。

- ・学校現場に対し、キャリア教育の在り方（理念、よさ）を、当班（静岡県総合教育センター）としてどのような言葉で伝えていくのか。
- ・基礎的汎用的能力をどう捉えるのか。特に課題対応能力、キャリアプランニング能力をどう定義付けするのか。
- ・学校におけるキャリア教育の評価方法をどう考えるのか。

### ア キャリア教育の在り方（理念、よさ）の捉え

当班では、学校におけるキャリア教育とはどうあるべきかを検討し、それを学校現場に分かりやすい言葉で伝えることは普及の第一歩になると考え、表3のような言葉で伝えていくことを共通認識した。

表3 進路指導支援班が考える「キャリア教育の在り方」

キャリア教育は、「現代及びこれからの厳しい時代・社会（不安定な経済状況・雇用、格差社会等）を生き抜くための力（＝変化に対応する力）を育成すること」が目的と言える。その力とは、キャリア教育においては「**基礎的汎用的能力**」と言う。

キャリア教育は新しい教育活動ではなく、「職業調べ」や「職場体験学習」のような特定の教育活動だけを指すものでもない。教科指導や特別活動、学級経営や生徒指導の場面も**キャリア教育の視点**でみることができる。今行っている教育活動をキャリア教育の視点である「**基礎的汎用的能力育成**」の視点で見直すことがキャリア教育の導入である。

キャリア教育は、将来に向けて付けたい力と学びを関連付け、今行われている教育活動に意味を持たせるもので、結果として児童生徒の**学ぶ意欲の向上の手立て**や「**自己肯定感**」「**自己有用感**」の醸成につながる。併せて「小中連携」、「成長を促す開発的な生徒指導」なども、キャリア教育の理念を裏付けとして実践することができる。また、学校経営面においては、「**本気で児童生徒と向き合う教員集団づくり**」の有効な手立てになる。

キャリア教育の背景にある我が国の不安定な経済状況、雇用、格差社会という厳しい社会においては、「生きる力」をより強調した「生き抜くための力」の方が、学校現場には伝わりやすいのではないかと考えた。また、キャリア教育を「職業観や勤労観の育成」と捉えがちであるということ踏まえ、端的に「基礎的汎用的能力を育成する教育」とし、その視点で今ある教育活動を見直すことが第一歩であると強調することとした。そして、キャリア教育を学校現場に導入する波及効果として、「学ぶ意欲向上」「自己肯定感の醸成」「教員集団形成」を挙げ、教職員の課題意識が比較的高いとされる学習指導、生徒指導、学校組織とキャリア教育とを関連付けた。

## イ 基礎的汎用的能力（特に課題対応能力、キャリアプランニング能力）の捉え

学校現場、教職員に現在のキャリア教育の在り方についてを働き掛けるとき、中教審答申（H23）で示された基礎的汎用的能力を抜きに語ることはできない。「中学校キャリア教育の手引き」（H23文部科学省）では、基礎的汎用的能力である4つの能力の具体的な要素を、次の表4のように挙げている。

表4 手引きで掲げる基礎的汎用的能力の具体的な要素

人間関係形成・社会形成能力	○他者の個性を理解する力 ○コミュニケーションスキル ○チームワーク ○他者に働き掛ける力 ○リーダーシップ 等
自己理解・自己管理能力	○自己の役割の理解 ○自己の動機付け ○ストレスマネジメント ○前向きに考える力 ○忍耐力 ○主体的行動 等
課題対応能力	○情報の理解・選択・処理等 ○原因の追及 ○実行力 ○本質の理解 ○課題発見 ○評価・改善 ○計画立案 等
キャリアプランニング能力	○学ぶこと・働くことの意義や役割の理解 ○多様性の理解 ○選択 ○将来設計 ○行動と改善 等

この表では、人間関係形成・社会形成能力や自己理解・自己管理能力に比べ、課題対応能力とキャリアプランニング能力では類似の要素が挙げられていて、どのような違いがあるのかが判断しにくく、違いを明確にさせる必要があった。班内で議論を重ね、この2つの能力については「キャリア教育の手引き」の記述の上に次のような前提（必要条件）をおくこととした。このようなまとめをしたことで、当班としての基礎的汎用的能力の理解が進み、この見解を学校現場への働き掛けの際のよりどころとした。

### ○課題対応能力を育成するための活動

課題解決に対し、「生徒が社会に出たときに役立つ」という意識を持った提示が指導者からあること、事後に社会への具体的使用例の提示があること、「活動と社会の関係性」があることなどの前提があれば、例えば数学の授業で方程式の解き方などの学習課題を追究することは、この能力の育成のための活動と捉えてもよい。

### ○キャリアプランニング能力を育成するための活動

課題対応能力の「計画立案、実行力、評価・改善」を育成する教育活動とキャリアプランニング能力の「行動と改善」を育成する教育活動との違いについて、今後の自分の生き方に活かせるような活動、将来につながる活動であれば、キャリアプランニング能力の「行動と改善」を育成する教育活動であると捉える。

## ウ 学校におけるキャリア教育の評価方法の考え方

キャリア教育の視点で見直して実践された教育活動で、子どもがどのような能力や態度を身に付けたのか、その教育活動は有意義であったのかどうかを評価する方法について、表5のように考えていくこととした。

キャリア教育の評価においては、「子どもが基礎的汎用的能力を身に付けることができたか」が観点となる。当班では、教育活動の事前と事後で子どもの変化を、教職員の観察や子ども自身が書く自己評価アンケート等を使うことで捉えて、まず子どもに対する評価をし、その上で行われた教育活動を評価するという方法を考え出した。

表5 キャリア教育の評価の考え方と方法

### ＜進路指導支援班のキャリア教育の評価に対する基本的な考え方＞

児童生徒が基礎的汎用的能力を身に付けたかどうかを検証することが、キャリア教育の評価である。具体的には、「行事・活動・授業等で、一人一人の児童生徒がどのような変容をしたのか」を教職員が確認し、その行事等が児童生徒の基礎的汎用的能力に役立ったのかみる「活動の有効性に対する評価」と、児童生徒の基礎的汎用的能力の身に付き具合をみる「子どもの変容に対する評価」の2種類ある。

### ＜評価の方法・手順＞

①育成したい能力に対して、A B C D段階（評価規準）を設定する。

例）人間関係形成・社会形成能力である「コミュニケーションスキル」あいさつ活動の評価規準

- A：相手の心情を察し、それに応じた挨拶ができる
- B：自ら率先して、挨拶ができる
- C：声を掛けられたら、挨拶ができる
- D：声を掛けられても、挨拶をしない

②一つの行事や授業等を通して、事前と事後のアンケート（感想、自己評価用紙）、事前と事後の生徒の様子を教師が観察してチェックするなどの方法で、評価規準の段階がアップした生徒がどのくらいいたのかを検証する。

※段階のアップとは？ 「D→C、C→B、B→A、C→Aに変容」

③段階がアップした生徒が〇%以上いた場合は、その活動は「効果があった」といえ、来年度も同じ方向で実施してもよい活動として評価する。  
逆に〇%以下の場合は、「効果が低い」として再検討を要する活動として評価する。この場合は活動自体の見直しをするとともに、変容がみられなかった子どもに対しては個別支援（キャリアカウンセリング）を行って能力育成を促す。

※〇%の基準は学校で設定

### (3) 「県版キャリア教育学習プログラム」の作成

#### ア 能力表の作成

「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」の調査研究報告書（国立教育政策研究所 2002）において提示された4領域8能力を育成する「学習プログラムの枠組み」（図4）の各能力を、基礎的汎用的能力のどの部分に転換させるのか、また、静岡県の教育の基本目標である「『有徳の人』の育成」と基礎的汎用的能力の育成とをどう関係付けるのかを班内で検討し、「県版キャリア教育学習プログラム能力表（例）」を試作することとした。（図5）

前述(2)のアの協議内容を基として、「学習プログラムの枠組み」の中にある具体的な各能力に記述されている文言を、基礎的汎用的能力の能力説明や要素と照らし合わせてあてはめていった。その際、学校での指導の場では「規範意識」という要素が大切になると考え、人間関係形成・社会形成能力の要素として記載することにした。その上で各項目が空欄にならないように、班内で協議して各学年の発達段階に適合するように文言を付け足していった。

静岡県の教育の特色を出すことは、県内の学校が取り入れやすくなる要因になると考え、基礎的汎用的能力と静岡県の教育基本目標「『有徳の人』の育成」を関連付けた。静岡県では「有徳の人」を下記の表6のように定義づけている。

表6 「有徳の人」の定義

- |   |
|---|
| ①自らの資質・能力を伸長し、個人として自立した人<br>②多様な生き方や価値観を認め、人との関わり合いを大切にする人<br>③社会の一員として、よりよい社会づくりに参画し、行動する人 |
|---|

この定義を当班では、「関わり合う人」「自らを伸ばす人」「行動する人」を育成することによって「自立した人」に近づけることができると捉えた。そして、基礎的汎用的能力のどの領域にあてはまるかを検討し、「関わり合う人」を人間関係形成・社会形成能力に、「自らを伸ばす人」を自己理解・自己管理能力、「行動する人」を課題対応能力、キャリアプランニング能力に相当すると判断し、表の中に盛り込んだ。

#### イ 能力表の活用方法

作成した「県版キャリア教育学習プログラム能力表（例）」は、学校現場において例えば以下のような場面や方法があると考えた。

- ・教職員が、担当の教育活動の目標と評価の観点を設定する際に参考にできる（PDCAサイクルの評価指標）。
- ・教職員が教育活動をキャリア教育の視点で見直す場合、今実践している活動が基礎的汎用的能力のどの能力を育てているのか、「有徳の人」のどのような要素を目指しているのかを明確にすることができ、指導の目的意識が高まる。
- ・教職員が、子ども一人一人のキャリア発達がどの程度であるのかを確認するなど、個別支援（キャリア・カウンセリング）の際の視点として活用できる。



静岡県版キャリア教育学習プログラム 能力表(例)

静岡県教育振興基本計画「有徳の人」づくりアクションプラン(2020・3月)より  
静岡県の教育の基本目標:「有徳の人」の育成

＜有徳の人＞  
①自らの實・能力を伸ばし、個人として自立した人  
②多様な生き方や価値観を認め、人との関わり合いを大切にすること  
③社会の一員として、よりよい社会づくりに参画し、行動する人

有徳の人	キャリア発達段階	小学校		中学校	高等学校			
		低学年	中学年					
人間関係形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるように、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形作る能力	他者の個性を理解する力	他者に働きかけられる力	コミュニケーションスキル	チームワーク	リーダーシップ	規範意識	
		自己の役割の理解	前向きに考える力	自己の動機付け	忍耐力	ストレスマネジメント	主体的行動	
自立	自分ができること「義務を感じる」こと「したいこと」について、社会との相互関係を探ることで、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動する。同時に、自分の思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぶことができる力	情報の理解・選択・処理等	本質の理解	原因の追及	課題発見	計画立案	実行力	評価・改善
		学芸活動の理解	多様性の理解	将来設計	選択	行動・改善		
人間的成長能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるように、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形作る能力	他者の個性を理解する力	他者に働きかけられる力	コミュニケーションスキル	チームワーク	リーダーシップ	規範意識	
		自己の役割の理解	前向きに考える力	自己の動機付け	忍耐力	ストレスマネジメント	主体的行動	
人間的成長能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるように、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形作る能力	情報の理解・選択・処理等	本質の理解	原因の追及	課題発見	計画立案	実行力	評価・改善
		学芸活動の理解	多様性の理解	将来設計	選択	行動・改善		

図5 県版キャリア教育学習プログラム 能力表(例)



## ウ 「県版キャリア教育学習プログラム」の基本的流れ

当班は次に、各学校の教育活動において作成した能力表（例）を活用して、キャリア教育学習プログラムの基本的流れ（手順）を考えた。（表7）

**表7 キャリア教育学習プログラム 基本的流れ**

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>①キャリア教育学習プログラム能力表（例）を参考にして、「育てたい力」を設定する。</li><li>②キャリア教育の視点で見直したい教育活動を絞り込む。</li><li>③運用マニュアル（全体構想）を作成する。</li><li>④その教育活動を実践する。</li><li>⑤評価・改善をし、次年度の活動や他の活動につなげる。</li></ol> |
|---|

また、この能力表を各学校へ提示する場合、次のようなことを働き掛けることとした。ただし、事前に学校の状況を調査した上で、各学校の要望に柔軟に対応していく。

- ・各学校のグランドデザインを基礎的汎用的能力育成の視点で見直し価値付ける。
- ・グランドデザインを材料として校長教頭等と話し合い、各学校の強みや弱点を洗い出し、育てたい能力を絞る。
- ・この際、「キャリア教育学習プログラム 能力表(例)」を参考にして自校で使えるようにアレンジする。
- ・当班が作成したキャリア教育全体計画例を参考にする。
- ・協力校の要望を聞き、必要であればキャリア教育の講義を全職員にする。

### (4) 研究協力校への働き掛け

研究協力校を選定するに当たり、小学校、中学校、高等学校各1校を選ぶこと、東部中部西部を振り分けること、キャリア教育の導入を考えていること等を選定条件として、協力校を探し、当班が実際に訪問をして協力依頼を行った。

その結果、掛川市立桜木小学校、藤枝市立青島北中学校、静岡県立御殿場南高校が協力校となった。詳しい選定理由は以下のとおりである。

#### ア 掛川市立桜木小学校

児童に自己肯定感や自己有用感を持たせることが学校の中心的な課題であり、キャリア教育が生き方教育や、自己肯定感の醸成の具現となるのではないかという考えを持っている。キャリア教育の推進・普及を目指している本班の研究を知って導入に意欲的であった。

#### イ 藤枝市立青島北中学校

平成24年度県教育委員会の「キャリアコンサルタント派遣事業」のモデル校に指定され、キャリア教育の実践を積んできた。その結果、職場体験学習や職業調べ・講話などを円滑に実施したが、事後の感想などから生徒の能力が高まったと言い切れないという課題が生まれた。教科の授業においてもキャリア教育を展開していきたいと強い関心があり、当班の研究の導入に意欲的であった。

## ウ 静岡県立御殿場南高等学校

「地域のリーダーとして活躍する人材を育成する」という明確な目標を持ち、校長のリーダーシップの下でキャリア教育を推進している学校である。内地留学でキャリア教育の研究をしてきた教諭が推進委員会を担当している。授業を含めた教育活動全体でのキャリア教育を推進するために、全体計画の作成を手がけている。キャリア教育の評価にも強い関心を持っている。多くの生徒が大学に進学する学校であり、普通科でのキャリア教育の推進が求められている中、本班の研究を実践・検証するのに最適な学校であった。

以上3校を研究協力校とし、25年度より、「キャリア教育学習プログラム」を適用する教育活動について担当教職員と当班とが協議をし、実際にプログラムを展開していく予定である。実践後は、生徒と教職員の事前事後アンケートを比較して教育活動を評価し、他の教育活動や平成26年度の教育活動に向けての改善策等を検討するように働き掛ける。

### (5) 研究協力校でのアクションリサーチ（協議、実践）

各研究協力校それぞれに対して、当班のキャリア教育の考え方や「キャリア教育学習プログラム」の仕組みなどを伝えるため、学校訪問を行った。この時は、教育課程編成作業等の中で改善の必要があると判断された教育活動等で、平成25年度に「キャリア教育学習プログラム」を適用する教育活動の一つだけ選び出してほしいと要望した。

## 2 研究仮説の検証、分析と考察について

前述(5)研究協力校でのアクションリサーチでのデータ（協働の記録、児童生徒・教職員の事前事後アンケート等）が検証の対象となるため、検証結果、分析と考察については次年度の報告とする。

## V 研究のまとめ（中間まとめと今後の方向性について）

### 1 研究の成果（ここまでの研究で有益だったこと）

研究の目的は、「県版キャリア教育学習プログラム」が、学校現場の教職員、児童生徒にとって効果的であったかということなので、平成24年度までの研究だけでは成果として挙げるができない。したがって、ここまで研究を進めてきた中で得られた知見と有益であったことを次に挙げることにする。

#### (1) 班内におけるキャリア教育の理念（基礎的汎用的能力等）の理解が深まった。

キャリア教育を学校現場に伝えていくためには、伝える側がその内容を深く理解し、分かりやすい言葉に翻訳できる力を持っていることが大切である。その意味でも平成23年中教審答申で新たに示されたキャリア教育の定義、基礎的汎用的能力等に関する班員の理解が、基礎研究における様々な議論で更に深まったと言える。

#### (2) 「キャリア教育に関するアンケート調査」「基礎研究」を研修に生かせた。

研究1年目に中学校キャリア教育に関するアンケート調査を行ったことで、学校現場が、キャリア教育をどのように実践しているのか、キャリア教育推進に対してどのような課題を抱えているのか等、現状を把握することができた。このことにより、今年度センター主催希望研修「小中キャリア教育基礎研修」を、教職員にとってより分かりやすい

内容に改善することができた。

**(3) 静岡県教育基本目標『有徳の人』づくりと関連付けた「キャリア教育学習プログラム能力表(例)」が試作できた。**

「キャリア教育学習プログラム能力表(例)」の作成は、基礎的汎用的能力のそれぞれの能力(人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力)の具体を、発達を考慮に入れて能力として考え出したり、学校現場に伝わりやすい言葉で考えたりという、きめの細かい作業となった。しかし、静岡県の実態に合った独自のキャリア教育の具体を創ろうとしていた当班にとって、『有徳の人』づくりと関連付けた能力表が、試作とはいえ完成したことは、非常に感慨深いことであった。また、班内で議論を重ねることで、今まであった4領域8能力の学習プログラムの枠組み(H16)が絶対的なものではなく曖昧であり、「あくまで例示」として示されている理由等の理解にもつながった。

**(4) 当班が目指すキャリア教育に対し、協力校のニーズが確認できた。**

本研究の目標は、キャリア教育の静岡県内の普及であるが、1章でも述べたように学校現場であまり認識されていないという現状があり、当班の研究に協力してくれる学校が果たしてあるのかという不安があった。しかし、「生きる力」と強く結びつくキャリア教育は、「生きる力」を自校でなんとか具現化したいという、学校のニーズが高かった。このため、研究協力校の選定、確定を非常に円滑に進めることができた。

## **2 今後の課題**

研究の総括をする平成25年度に向けての課題は、次のことである。

**(1) 「県版キャリア教育学習プログラム」の客観性**

試作した「県版キャリア教育学習プログラム」の能力表や評価方法が、本当に各学校で通用するのかという不安が残る。研究協力校を含めたさまざまな関係者で客観的に検討してよりよいプログラムとしたい。

**(2) 研究協力校において「キャリア教育学習プログラム」を実践する際、当班の支援が、研究協力校のニーズに合わせて適切に行われるか。**

「キャリア教育学習プログラム」は試作であるため、学校現場での実践事例はなく、もちろん当班の支援の実績もない。まさに手探り状態で研究を推進しなければならないため、研究協力校のニーズに応えられるかを危惧している。平成25年度のアクションリサーチでは、研究協力校へできる限り出向き、そこで浮き彫りになった課題を克服するために、進路指導支援班で一丸となって考え、全力で支援していきたいと考える。

## 【参考文献】

- 大野木裕明『アクションリサーチ法の理論と技法』 北大路書房 1997
- 西道 実『小・中学校におけるキャリア教育プログラムの効果測定』  
プール学院大学研究紀要 第49号 2009
- 文部科学省『小学校キャリア教育の手引き（改訂版）』 教育出版 2011
- 文部科学省『中学校キャリア教育の手引き』 教育出版 2011
- 文部科学省『高等学校キャリア教育の手引き』 教育出版 2011
- 『平成21年度 研究紀要 第14号』 静岡県総合教育センター 2010
- 『平成23年度 研究紀要 第16号』 静岡県総合教育センター 2012
- 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』  
中央教育審議会 2011
- 『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について調査研究報告書』  
国立教育政策研究所 2002
- 『報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』  
キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議 2004

## 【研究組織】

（平成23年度）研究担当所員

人づくり支援課	課長	齋藤 洋子
進路指導支援班	班長兼主任指導主事	丹治 正
	指導主事	長島 康雄
	指導主事	杉田 雅良
	実務研修員	河田 純次

（平成24年度）研究担当所員

人づくり支援課	課長	中村 芳美
進路指導支援班	班長兼主任指導主事	丹治 正
	指導主事	長島 康雄
	指導主事	松村 修
	実務研修員	藤内 徹